

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 13 日現在

機関番号：32640

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520070

研究課題名（和文） ヨセフスの近代語訳に見られるキリスト教的反ユダヤ主義

研究課題名（英文） Anti-Judaism in the reception history of the works of Josephus in modern English translations

研究代表者

秦 剛平 (HATA GOHEI)

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：20103715

研究成果の概要（和文）：

紀元後 1 世紀のユダヤ人作家フラウィウス・ヨセフス（37 / 38 - 100 年頃）はその浩瀚な著作、『ユダヤ戦記』全 7 巻、『ユダヤ古代誌』全 20 巻、『アピオンへの反論』全 2 巻、それに『自伝』をギリシア語で書き残した。英語圏でのヨセフスの著作の英訳は 1602 年に始まった。本研究では 17 世紀から 19 世紀中頃までに刊行された諸訳を収集し、近代語訳に付されている序文や前置き、訳注、論文などに認められる反ユダヤ主義的な言説等を抽出、さらには印刷上の活字媒体やレイアウトなどに認められる反ユダヤ主義的な傾向等を分析し、英語圏におけるキリスト教的反ユダヤ主義の形成にヨセフスの著作の近代語訳が果たした役割を明確にした。

研究成果の概要（英文）：

Flavius Josephus, the first century Jewish historian, left behind the Jewish War in 7 books and the Jewish Antiquities in 20 books in Greek. The first English translation was made in England in 1602. I have collected all the English translations of Josephus from the Lodge's translation of 1602 to the Robert Traill's translation of 19<sup>th</sup> century, and attempted to analyze all the anti-Jewish elements inherent in prefaces footnotes, dissertations attached to them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、宗教学

キーワード：(1) ヨセフス、(2) 『ユダヤ戦記』、(3) 『ユダヤ古代誌』、④ ヨセフスの近代語訳、  
(5) 七十人訳聖書、(6) 聖書のテキスト本文

## 1. 研究開始当初の背景

日本において「反ユダヤ主義」が知識人の間で論ぜられることがあっても、「キリスト教的反ユダヤ主義」が論ぜられることはほとんどなかった。ましてキリスト教徒によって論ぜられることは皆無に近いものであった。それは、多分、キリスト教徒の正典文書である新約聖書や最初の数世紀の教会の作家たちの残した文書が直接大きく関わるからである。

福音書にはイエスを十字架に架けることをめぐって、ローマのユダヤ総督ポンテオ・ピラトとユダヤ人たちのやりとりが残されている。そのやりとりに歴史的眞実があるとは思われないが、マタイ福音書27・25によれば、ピラトが「イエスが十字架に架けられて血を流しても自分の責任ではない」と言うと、彼の周囲にいたユダヤ人たちが「その血の責任は、われわれと子孫にある」と言ったとされる。ここはキリスト教的反ユダヤ言説の「依って立つ箇所」である。換言すれば、ここはユダヤ人を「神の子殺し」と非難するときの「依って立つ箇所」である。神の子殺しをユダヤ人たちでさえも認めているのではないかとされる箇所である。

キリスト教的反ユダヤ主義は明白に福音書に由来するものであるが、その活発な議論はなされてこなかった。「さわらぬ神に祟りなし」、「さわらぬ福音書に祟りなし」であるのかもしれないが、反ユダヤ主義の根幹部分を最初に直視しなければ、それについての学問的議論はできなくなる。

歴史的に言えば、福音書に見られるこの反ユダヤ主義の言説はローマを相手にした第1次ユダヤ戦争(66-70年)でのエルサレム陥落と神殿の炎上崩壊と結びつけられた。これを最初に行ったのは4世紀の最初のキリスト教史家エウセビオスであり、彼はその著作『教会史』(拙訳、講談社学術文庫所収)の中で繰り返し次のような申し立てを行う。ユダヤ人たちは人類の救い主であるキリストを十字架に架けたが、それを悔い改めることはしなかった(これが罪と見なされる)。神は彼らの悔い改めを忍耐強く待ったが(イエスが亡くなった30年から70年まで)、それにも限界があり、ついに対ローマのユダヤ戦争でローマ人を「神の器」として使用してユダヤ人を敗北に追いやり、彼らの神殿を焼き払い、彼らをパレスチナから追い出し、ディアスポラ(離散)の民とされた(これが罰と見なされる)、と。

これは「罪」と「罰」をドッキングさせた応報思想であり、応報神学である。ここでの応報思想と神学を支えるのが、皮肉なことに、ユダヤ人作家ヨセフスの著作、なかでも『ユダヤ戦記』なのである。なぜならば、この著作こそは紀元後70年のエルサレムの

崩壊と神殿の炎上・崩壊に至るまでのプロセスを紀元後66年の戦争の勃発に遡って詳細に書き記しているからである。ユダヤ人たちの書き残した文書資料(新約聖書とヨセフスの著作)を使用して、反ユダヤ主義の論理がキリスト教の教会の作家たちによって展開されることになる。問題は複雑なのである。

ヨセフスの著作は西欧のキリスト教徒が聖書と一緒に読み、ときには聖書以上に読み込んできたもので、それは新約聖書が書かれた頃に著作された文書である(『ユダヤ戦記』の著作年代は紀元後75年以降80年以前、『ユダヤ古代誌』の著作年代は90年代の前半)。それゆえ西欧キリスト教世界における近代の反ユダヤ主義の研究は、一方で新約聖書の福音書を問題にし、他方で対ローマのユダヤ戦争について書き残したヨセフスの著作そのものが、その近代語訳の歴史的な背景の中で、研究と分析の対象とされねばならない。

研究代表者は、過去30年以上にわたり、紀元後1世紀のユダヤ人歴史家フラウィウス・ヨセフスの著作研究を行い、ギリシア語で著わされた『ユダヤ戦記』全7巻、『ユダヤ古代誌』全20巻、『アピオンへの反論』全2巻、『自伝』を翻訳し(山本書店、1979-84;ちくま学芸文庫、1999-2000)、イエシバ大学教授ルイス・フェルトマンと共同で『ヨセフス論集』全4巻を編纂し(山本書店、1985、E. J. Brill)、ヨセフスについての啓蒙書『ヨセフス—イエス時代の歴史家』を公にし(ちくま学芸文庫、2000)、シャイエ・J・D・コーエン著『ヨセフス—その人と時代』を紹介し(山本書店、1991)、さらにはヨセフスの著作をもっとも濫用し、もっとも誤用した紀元後4世紀のカエサリアの司教エウセビオスの『教会史』全10巻を翻訳し(山本書店、1986-88)、イェール大学教授ハロルド・アトリッジと『エウセビオス論集』全3巻を編纂した(山本書店、1992、E. J. Brill)。

研究代表者は、この作業過程で参照したヨセフスの著作の近代語訳、なかでもイギリスで出版された近代語訳に付された長大な解説や、その本文に付された膨大な脚注、そしてその全訳にしばしば付された論文や補遺などに見られる反ユダヤ主義的な言説に注目し、ヨセフスの著作の近代語訳がイギリスやその他の英語圏の反ユダヤ主義の形成にどのように与ったかに多大な関心を抱くに至った。

## 2. 研究の目的

キリスト教的反ユダヤ主義は、ユダヤ民族に対するキリスト教側の一方的かつ不当な神学的断罪である。それは、ユダヤ民族を「キリスト殺し」とか「神によって永遠に呪われた民」と規定して告発し——これは人類史上他に例を見いだせない悪質きわまる告発である——、そのためユダヤ民族は以後その2000年の歴史において様々な悲劇や悲惨を体験しなければならぬ羽目に陥った。

研究代表者はキリスト教の最初の数世紀の教会著作家たちに認められる反ユダヤ主義の思想を近代語訳の展開の中で明らかにしようとしてきた。なお、中世の教会の著作家たちや聖堂や教会を飾った絵画、ルターの反ユダヤ主義、歴代のローマ教皇に認められる反ユダヤ主義的言質、20世紀に台頭したナチズムの思想に見られるユダヤ人排斥思想などを支えるために利用されたヨセフスの著作の誤用、濫用、そして悪用などは別途扱いをしてきたが、それについては、たとえば、拙著『反ユダヤ主義を美術で読む』（青土社）ほかを参照。

## 3. 研究方法

ヨセフスの近代語訳に見られる反ユダヤ主義を問題にするには、その近代語訳すべてが収集の対象にされねばならない。そこにひとつの「ヨセフス全集」の漏れがあってはならない。そこで研究代表者はオックスフォード大学が世界に誇る一大中央図書館であるボドレー図書館でヨセフスの著作のすべての版を調査できると考えたが、ボドレー図書館はヨセフスの最古の写本と呼ばれるものを多数蔵し、また近代語訳の大半も所蔵していたが、本研究に必要なヨセフスの近代語訳の初版本すべてを所有しているわけではなかった。そのため研究代表者はロンドンの古書屋巡りをし、本研究に必要な初版本などがあればそれを購入し、また外国のヨセフス収集家らと情報を提供しあい、研究環境を整えた。

## 4. 研究成果

以下は研究代表者が挙げた研究成果である。

(1) 本研究に必要な予備的考察（福音書に見られる反ユダヤ主義について）

① マタイ福音書に認められる反ユダヤ主義については、十字架にイエスを架けるときのローマ総督ポンティオス・ピラトの言葉が歴

史的なものであるのかどうかを議論した。それはマタイ福音書が書かれた紀元後80年代の状況を反映するものであり、イエスが十字架に架けられたときにピラトが口にした言葉ではないことを指摘したが、この指摘の背後には、19世紀以来はじまったプロテスタント側の福音書研究の成果、とくに「イエスの語録」の成果がある。本研究者はその成果を十分に理解し、取り入れた。

マタイ福音書にはじまる反ユダヤ主義は最初の数世紀の教会著作家たちに大きな影響を与えたが、本研究者はとくに、4世紀のエウセビオスに至るまでの教会著作家たち、たとえば、サルディスのメリトーン、カルタゴ出身のテルトリアヌス、カイサレイアのオリゲネスらに認められる反ユダヤ主義的言説を問題にし、それらが「罪と罰」の視点に立つエウセビオスの反ユダヤ主義に与えた影響にも立ち入った。なお、この研究の過程で本研究者は、ヨセフスの著作を最初に利用した教会著作家は新約聖書の外典文書である『ヤコブ原福音書』の著者であることを明らかにしたが、これを解明したのはおそらく本研究者がはじめてではないかと思われる。

(2) ヨセフス全集の近代語訳の調査および分析

① トーマス・ロッジ訳「ヨセフス全集」、1602年の初版本（オックスフォード大学ボドレー図書館所蔵）。

このロッジ訳の研究過程で知り得たことは、イギリスの詩人ミルトンがこの全集を読んでいたことである。ロッジは英訳のヨセフス全集を世に送り出したのち、英国国教会に従わないローマ・カトリックであるという嫌疑をかけられ、大陸に亡命する。ミルトンとヨセフスの著作との関わりは将来の研究課題になり得ると思われた。

② 前掲書の改訳版（1676年）。

ロッジ訳の改訳が出回ったのは、1667年にフランスでアルノルド・ダンディリーによってヨセフス全集が刊行されたからである。この仏訳はヨセフスの著作のラテン語訳からの翻訳ではなくて、ギリシア語からの翻訳であることを銘打ったものである。

③ ロジャー・レストランジ訳「ヨセフス全集」、1692年出版の初版本。

この全集の冒頭にはこの全集の購入希望者の名前、職業、そして購入予定部数を示すリストが掲載されており、その分析により、ヨセフス全集が必ずしも聖職者によって待望されたものではなく、一般の読者によって

待望されたものであることが分かる。このレストランジ訳以降のヨセフ全集には「購入者リスト」が付されており、それを分析することで、ヨセフを購入する社会的な層を知ることができる。なお、ヨセフの著作の初版の刷り部数は例外なく1000部以下である。書物の印刷が依然として多額の資金を要するものであるかがよく分かる。

④ ロッジ訳「ヨセフ全集」簡易版、1699年出版の初版本。

この簡約版には8頁におよぶ「前置き」が付され、そこには本研究の分析の対象とされる反ユダヤ的な言説が見られる。簡約版は廉価であるだけに、その刷り部数は多く、反ユダヤ主義的言説を広めるには絶好の媒体物となる。

⑤ ジャクソン訳「ヨセフ全集」、1732年出版の初版本（オックスフォード大学のボドレー図書館所蔵）。

本全集は版を重ねなかったため、ボドレー図書館では稀覯本扱いされている。

⑥ ジョン・コート訳「ヨセフ全集」、1733年出版の初版本。

この全集ではギリシア語からの翻訳であることがうたわれる。それまでのヨセフ全集はすべてラテン語訳からの英訳であった。本書が貴重なのは、その前置きで「ヨセフの最初の英訳はモリソンによってなされた。それは非常に古くさい年代物で、そこでの言い回しは、その後を継いだものと同じく、概してギリシア語に近いものの、今となってはカビ臭いものである」と、ロッジ訳よりも古い英訳書の存在を示唆していることである。それが全集であったのか、部分訳の書であったのか、それとも抜粋訳の書であったのかは不明であるが、モリソン訳の存在は幻である。研究代表者はこれまでヴァチカン図書館や、イタリアのアンプロジアーナ図書館、ダブリンのマシュー図書館、イギリスの大英図書館、ケンブリッジ大学の図書館などに本書の存在を照会してきたが、今日までその存在を確認できないでいる。

⑦ ウィリアム・ウィストン訳「ヨセフ全集」、1737年出版の初版本。

ウィストンはケンブリッジ大学で教えていたニュートンの後継の教授であったが、「三位一体」の教えを拒否したために大学を追放された人物である。彼は自分のヨセフ全集に8本の論文を付している。これらの論文もわれわれの二次的分析の対象とされたが、われわれの直接的分析対象とされたのはウィストン訳に付された膨大な数の註に見られる露骨な反ユダヤ主義であった。彼はそ

の註のひとつで次のようなことを書く。すなわち彼は、「実際、わたしには、すべての民族が世界のはじめからこうむった不幸も、ユダヤ人たちのこうむった不幸には及ばないように見える」の「ユダヤ人たちのこうむった不幸」に註を付して「われわれの救い主の殺人者となったユダヤ人たちがこうむったこれらの災禍が世界のはじめ以来の最大級のものになったことや、われわれの救い主が直接予告していたこと、そして事実そのとおりになったことなどに関しては、ヨセフはもっとも純正な証人である」と。この種の悪質な註が取り除かれるのは1921年に出版されたマルゴリウスの手になるウィストン訳の「ヨセフ全集」においてであるが、ウィストン訳も随分と長い間に渡って反ユダヤ主義の害毒を垂れ流したことになる。

ウィストンはアイザック・ニュートンの高弟であったため、その翻訳はテキストにどこまでも忠実な翻訳であると過大な評価を受けるが、ウィストン時代にはまだヨセフ全集の底本にし得る信頼できるギリシア語テキストは存在していない。それが手に入るようになるのは19世紀の終わりであるから、ウィストン訳への過大評価は問題であったが、それでも英語圏では以後、ヨセフ全集といえば、ウィストン訳を指すようになる。ウィストン訳以後も、ウィルソン訳が1740年に、トンプソンとプライスの共訳が1777年に、クラーク訳が1785年に、メイナード訳が1789年にそれぞれ出版され、1847年になってはじめてウィストン訳の訳業を徹底的に批判するロバート・トレイル訳がダブリンで出版される。研究代表者はダブリンのトリニティ・コレッジに招待され、このトレイル訳について講演を行った。このトレイル訳の存在と意義は、ヨセフ研究者の間でも知られていないものであり、本研究の成果発表は、ヨセフ受容史の研究で意義あるものであった。

⑧ メイナード訳「ヨセフ全集」、1789年出版の初版本。

研究代表者は、その影響力の点ではウィストン訳の「ヨセフ全集」に注目したが、同時にメイナード訳のヨセフ全集にも注目した。こちらには10の付き物が見られるが、その一つは80頁以上におよぶ長文の論文「1700年以上を含む、フラウィウス・ヨセフスの時代以後のユダヤ人の歴史」と題するものである。一般の人びとが単純に抱くユダヤ史への疑問は、なぜイエス・キリストを受け入れない「呪われた民」が未だ歴史の上から抹殺されずに、その存在がゆるされているのか、彼らの存続には撰理的な意義があるのか、というものであったであろうが、メイナードは、ヨセフスの死（紀元後100年

ころ) 後からはじめて彼の時代までの1700年の歴史を跡づけることで一般の人びとの疑問に答えようとする。彼は、ユダヤ人の運命について、一方で「ユダヤ人どもが福音書を断固拒否して神の民でなくなって以来、神が顕現して彼らのために働かれることはまったくない。彼らは、その背信の罰として、過去長い期間にわたって、この世の庇護者や精神的な庇護者なしに全世界に散らされてきた。彼らはその住むすべての地で軽蔑され、すべての王国の人びとの愚弄と嘲笑の対象とされている」と述べると同時に、他方で「ユダヤ人どもは、かくも多くの手段が彼らに罪の意識を自覚させるために講じられた後でも、依然として背信を続けている。それゆえ、彼らが徹頭徹尾非難されねばならぬことは認められねばならない。とはいえ、われわれには、あらゆる時代に、知識や慈悲心にまさる熱意でそうしてきたキリスト教徒たちにならって、彼らを追放したり、虐待したり、危害を加えたり、圧迫したりすることを赦されているわけではない。慈悲心は信仰に優る。そしてわれわれが残酷で慈悲心のない方が、彼らが頑迷固陋で不信仰であるのにまさる」とも述べる。

以上の研究成果は、主として、京都大学基督教学研究紀要の『基督教学研究』第34号(2011年)の巻頭論文として発表した。これはダブリンのトリニティ・コレッジのユダヤ教学教授のズレイカ・ロジャーズが責任編集する *Companion to Josephus* にも掲載予定である。なお研究代表者は、ヨセフスの著作に関する論文でエジプトのテルバスタ発掘の重要性を強調し、またヨセフスとその著作『ユダヤ古代誌』を著したときに使用したギリシア語訳聖書に関わる論文を著したが、これら2つの論文は京都大学学術出版会から2011年に刊行された『古代世界におけるモーセ五書の伝承』に収録され、その英語版は2012年にオランダのブリル社から出版された。この二つの出版は東京女子大学教授守屋彰夫氏との共同作業である。

～結 び～

人類史の上ではさまざまな不条理な差別が見られるが、その差別が宗教的な要因に根ざすものであるとき、それはもっとも深刻なものとなり、継続性をもつようになる。その典型的な事例がキリスト教的反ユダヤ主義にほかならない。

問題は差別を行っている者たちや共同体に「差別は犯罪である」ことを認識させることであるが、これはそう簡単にできるものではない。なにしろ、この犯罪は新約聖書の時代から今日まで2000年の長きにわたって継続されてきたものだけに、差別の解消に

は膨大な時間がかかるが、われわれ研究者はその是正を地道な研究を媒介して行わねばならない。2000年の偏見の歴史の是正には2000年の歴史の中で見られた反ユダヤ主義の事例がすべて問題にされ、ことの深刻さが浮き彫りにされねばならない。たとえば、最初の数世紀の教会教父たちの神学形成に問題がなかったのか、カトリック神学に問題がなかったのか、ルターの神学に問題はなかったのか、歴代の教皇のユダヤ人理解に問題がなかったのか等々が議論されねばならないが、われわれはこれらの問題から派生したヨセフスの近代語訳に見られるキリスト教的反ユダヤ主義を問題にし、ユダヤ人であるヨセフスの著作でさえ2000年の歴史中ではキリスト教側の反ユダヤ主義に利用されてきた系譜を明らかにした。われわれはこの研究成果がとくにヨセフスの近代語訳を生み出した西欧のキリスト教社会で読まれ、人びとが反ユダヤ主義の系譜を理解し、その系譜の裏にあるユダヤ人の悲惨を直視することを願ってやまない。歴史の直視と現実の悲惨の直視こそが、人類史の上のさまざまな差別の是正には必要である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ①「秦 剛平、「英語圏におけるヨセフスの近代語訳とその受容史」、『基督教学研究』、第34号、2011年12月30日、30頁(京都大学基督教学研究室)、査読有

[学会発表] (計1件)

- ① Gohei Hata, “The Fall of Jerusalem and the Prophecy of Jesus”, Society of Biblical Literature, 22th November 2009, New Orleans, USA

[図書] (計7件)

- ① Zuleika Rogers and Honora Chapman eds. *Companion to Josephus* (Blackwell, 2012年出版予定)Gohei Hata, Tommaso Leoni, Paul Spilsbury, Sabrina Inowlocki and others.
- ② 秦 剛平、『聖書と殺戮の歴史—ヨシュアと士師の時代』、京都大学学術出版会、2011年12月、359頁
- ③ Jack Pastor, Pnina Stern, Menahem Mor, eds. Flavius Josephus: Interpretation and History (Supplements to the Journal for the Study of Judaism(E. J. Brill, 2011), Gohei Hata (pp. 177-191), Kenneth Atkinson, Mordechai Aviam and others.
- ④ 秦 剛平、『名画でたどる聖人たち もう一つのキリスト教世界』、青土社、2011年3月、385頁
- ⑤ 渡邊 直樹、秦 剛平 他、『宗教と現代がわかる本』、平凡社、2011年3月、206-209頁
- ⑥ 秦 剛平、『古代世界におけるモーセ五書の伝承』、京都大学学術出版会、2011年2月、p7-p30、pp. 127-142
- ⑦ 秦 剛平、『書き替えられた聖書—新しいモーセ像を求めて』、京都大学学術出版会、2010年12月、335頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

秦 剛平 (HATA GOHEI)

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：20103715